

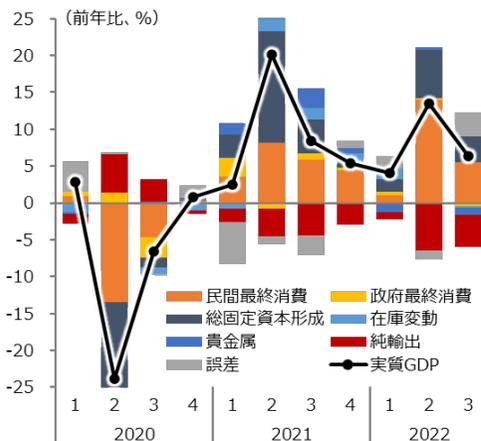
## インド

GDP (2022年7-9月期)

## 7-9月堅調も、先行きはコロナ危機からの回復一巡で成長鈍化へ

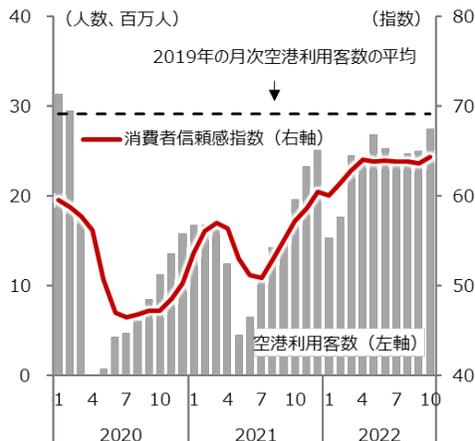
政策・経済センター  
金成大介  
03-6858-2717

## 1 実質GDP成長率



注：CEICより三菱総合研究所作成

## 2 空港利用客数と消費者信頼感



出所：CEICより三菱総合研究所作成

## 評価ポイント

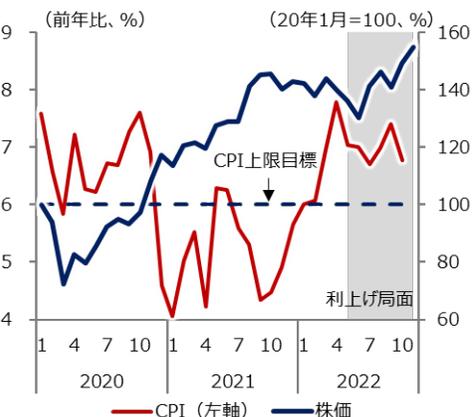
## 今回の結果

- 22年7-9月期のインドの実質GDP成長率は前年比+6.3%となった。経済活動の正常化の進展のもと、消費、固定資本投資といった内需が成長のけん引役となり、8四半期連続のプラス成長となった（図表1）。
- 産業別の粗付加価値では、貿易・宿泊・運輸・通信業が経済活動の活性化を追い風に前年比+14.7%となる一方、製造業が輸出の伸び悩みから同▲4.3%となった。

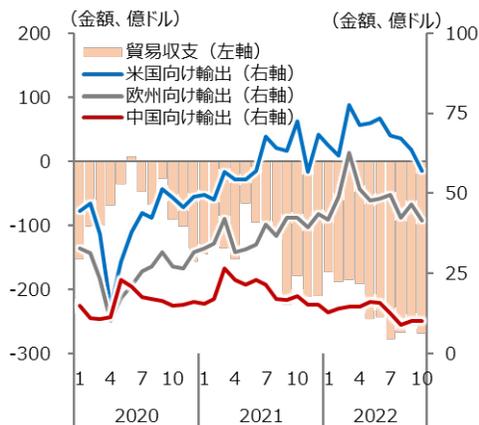
## 今後の注目点

- コロナ危機からの回復による内需の押し上げ効果は概ね一巡しており、外需の下振れ圧力が強まるなかで先行きのインド経済は成長減速が見込まれる。
- 空港利用客数は、ほぼコロナ危機前の水準を回復しており、人流の回復は実現している。消費者マインドも概ね横ばいが続いており、経済活動再開による消費者マインドの改善も実現している（図表2）。内需が経済成長のけん引役となることは変わらないものの、大幅伸長は期待できない。
- CPIは4月をピークに軟化、利上げ局面でも株価は堅調に推移しており、今のところ利上げの悪影響は限定的である（図表3）。インド中銀は、CPIが23年1-3月に上限目標内へ収束すると予測しているが、不確実性の高さも指摘している。インフレ抑制が進まない際の追加利上げが、内需の重しとなるおそれがある。
- 純輸出の先行きは、より注意が必要だ。中国向け輸出の停滞に加え、米国および欧州向け輸出が減少に転じ、高水準の貿易赤字が継続している（図表4）。中国におけるゼロコロナ政策の長期化、欧米経済の景気後退による輸出減少が、経済成長の下押し要因となるリスクもある。
- こういった状況下、インド中銀は実質GDP成長率は22年10-12月期、23年1-3月期ともに前年比+4.6%への低下を予測している。コロナ危機からの回復による内需の押し上げ効果一巡後のインド経済が、インフレ圧力増大や欧米経済減速による輸出減少といった荒波を乗り越えることができるかに要注目だ。

## 3 CPI・株価

注：株価はBSE SENSEX指数。直近は、株価は22年22年11月、CPIは22年10月。  
出所：CEICより三菱総合研究所作成

## 4 貿易収支と米国・欧州・中国向け輸出

注：欧州向け輸出は、オランダ、英国、ベルギー、ドイツ、フランス向け輸出の合計。  
出所：CEICより三菱総合研究所作成